

2025年8月29日

平成7年度 県民カレッジ委託講座 高岡地区 教養講座

ONLY CONNECT

すべてはつながっている

英語“ワクワク授業”研究所 代表
リンク・インタラック Executive Consultant
中嶋 洋一

何の音でしょう？



これは、赤ちゃんの「心音」です。
誰もが、みな、この鼓動のように
力強く生きています。

皆さんは昭和生まれですね。

お父さん、お母さんは大正生まれ。

そして、そのお父さん、お母さんは明治生まれ・・・。

その祖先を、江戸時代、鎌倉時代、平安時代・・・。

ずっと遡っていくと、みなさんの祖先は合わせると
だいたい何人になるのでしょうか。



自分の番

いのちのバトン

父と母で二人

父と母の両方で四人

そのまた両方で八人

こうしてかぞえてゆくと

十代前で千二十四人

二十代前では――？

なんと百万人を越すんですよ

過去無日曜の

いのちのバトンをあなたはここに

いまここに

自分から番をまかして

それが

あなたにいのちを

それがわたしの

いのちです

あー

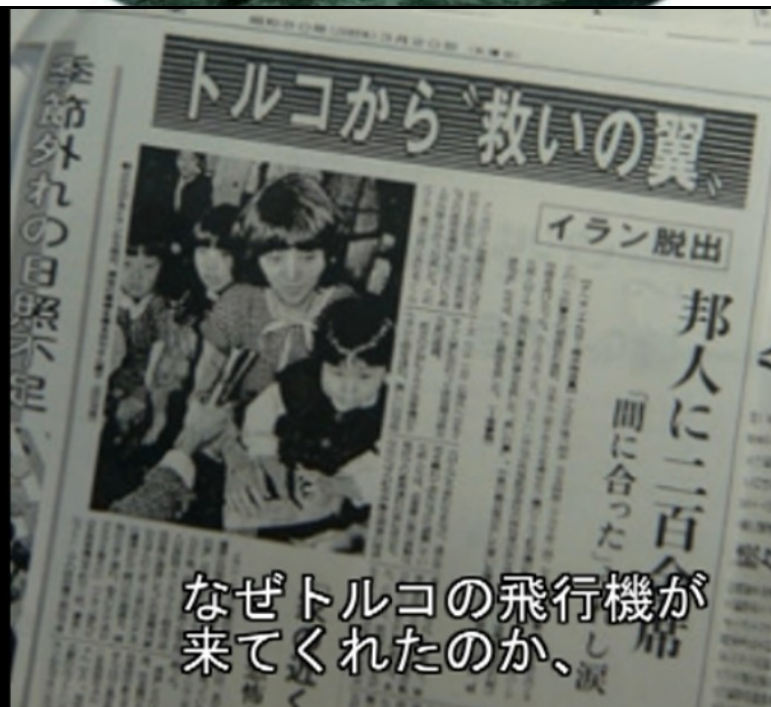
人は「命」を繋いでいます。



トルコ人に食べさせてあげました。



トルコへ大切に送り届けられました。



なぜトルコの飛行機が
来てくれたのか、

日本政府もマスコミも
知りませんでした。

日本人がしてくれた救助活動を

今でも、トルコの人たちは

忘れていません。

東日本大震災のとき、世界中が日本人の行った行動に驚きました。それは・・・



校庭に白線が引かれ、整然と配給を待つて並んでいる列を見て

ネット上では各国で

きょうたん しょうさん
次のような驚嘆と賞賛の声が
上がりました。

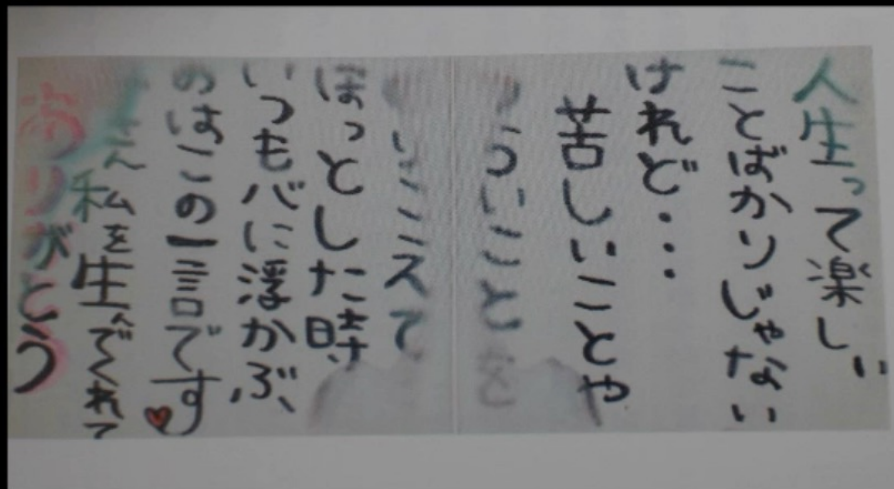
「自分の国では考えられない。」



駅で電車を待っている人たちが、通路を開けて整然と並んでいる写真を見て

「私たちの国も日本から学ばねば。」

ぜったい
「日本は絶対に立ち直る。
これまでも立ち上がってきた。」



津波のせいで、最後の部分は文字が
 滲^{にじ}んでしまっていました。



自分が関わった多^{おほ}くの人たちに
 惜^{おも}しまれながら見送^{みおく}られます。

あなたはこれから、いろんな命と
 どう向^むきあっていきますか。

フォト・ライターの **かど まどか** さんが
南米のパラグアイから、ビデオ・メッセージを
送ってくださいました。

彼女は東日本大震災の後、現地を訪れて
多くの人の生の声を集め、「ハナミズキ」と
いう本にまとめて出版されました。



角 円(かど まどか)さん

私は、被災地を訪れ、メディアから見聞きする「復興」という2文字を勘違いしていたことを知りました。私の復興のイメージは、多くの住宅が再建され、人が集い、新しい町が再生しつつある姿でした。

しかし、実際には生活の営みを感じられない、色のない景色がずっと続いていたのです。私は、復興の光の部分しか見ていませんでした。実際に足を運び、聞いた言葉には、重みと苦しいほどの悲しみと痛みが詰まっていました。

6歳の娘を亡くされたお母さんは、新しい建物が建つことが必ずしも復興にならないことを教えてくださいました。娘さんが最後に生きた場所には、新しい建物がもうすぐ建つそうです。そうすれば、娘に手を合わせる場所が無くなってしまふ、悲しくてたまらない気持ちになる、と言われました。

中学校1年生の息子さんを亡くしたお母さんは、あの日「津波はここまで来ないから、大丈夫だよ」と息子さんに言ってしまったことをずっと後悔し続けておられます。数枚残った息子さんの写真は見るのが辛く、家には飾っていないのだと言われました。

メディアは「5年経った」と報道をしています。しかし、遺族の方々にとって、節目などありません。遺族は年月ではなく、自分の時間軸で悲しみと向き合い、時に立ち止まり、時に後退しながら少しずつ前に進んでいけます。

遺族が話しながら涙される姿に、ペンを走らせ、カメラを構えることが果たして正しいことなのかどうか、迷うこともありました。全く書けない日が何日も続きました。

ある女性は、「手紙を書こうとするとどうしてもペンを止まってしまう。書けなくてごめんね」そう、私に言われました。

自分のやろうとしていることが遺族を傷つけてしまっているのではないか。私がやろうとしていることは、間違っているんじゃないか。私はそう考えて葛藤しました。

しかし、死を見つめることは「生きること」を考えること。手紙が書けないというのも、また届けるべき遺族のメッセージでもある、と自分なりの答えを出し、取材を続け、出版に至りました。

昨年3月、私は完成した本を手し、再び被災地へと向かいました。国会図書館への献本も無事済みしました。遺族に再会して、本になった報告をし、直接お礼を伝えました。佐々木さんには、真っ先に報告をしました。彼は、ご家族に再会したかのように本を手にとられました。後から送られてきたお手紙には次のように書かれていました。

「これで、妻と娘は永遠になりました。ありがとう」
その言葉を読んだ時、私は涙が溢れて止まりませんでした。
と同時に、私の仕事の重みも感じました。これからも、フォト・
ライターという仕事を通して「命」の大切さを多くの人に訴えて
いこうと思います。

生きている、それは、決して当たり前ではないということ
「見えないもの」ほど大切なものはないということ
見えないものを交換し合うのが人間の務めであること
それを伝えていけたらと考えています。
皆さんも、たった一つの命をいつまでも大切にしてください。

かど まどか（フォト・ライター）

みなさんは、この講座で何を考えられましたか。

何に気づかれましたか。

ふと、決心されたことは何ですか。

オンリー・コネクト(すべてはつながっている)。

つながるのも、つなげるのも「わたし」です。

大切な方に、見えない「バトン」を渡す。

あなたは、今、どんなバトンを、どの方に渡そうとしておられますか。